



東・南・西と3面に広がり、風景を取り込む縁側の横連窓。椅子高の目線にガラス窓が配置されるようデザインされている。



作りつけのベンチが印象的で、和洋が調和した客室。天井は杉へぎ板の網代張りとし杉の一枚板で構成。照明は床照らしも兼ねている。



写真上 / 居室の天井埋め込み形の照明。藤井自身のデザイン。写真下 / 約30cmの畳の段差に設けられた導気口。中に埋設された導気筒を通して外気を取り入れる。

居室から右手に食堂を望む。食堂は一段高く設計され、独立性を持たせている。

環境工学に着目し建てられた環境共生住宅の先駆け
歴史と景勝の地、京都大山崎に建つ「聴竹居」は、大正から昭和にかけて、わが国でいち早く環境工学に着目して実践した、建築家藤井厚二が、1928（昭和3）年に建てた実験住宅です。藤井は自邸を実験住宅として次々と建設。自ら住み改良を重ね、日本の気候や風土と西洋的な空間を融合させた住宅を完成させました。その設計は高く評価され、1999年に「日本の近代建築20選」(※)にも選定。自然との調和を考えた建築デザイン、換気・通風への配慮など、快適で健康に暮らすための工夫が随所に見られる環境共生住宅の先駆けです。

※日本の近代建築20選
DOCOMOMO Japan (近代建築の記録と保存を目的とする国際学術組織の日本支部) が選定した日本を代表する近代建築。現在ではDOCOMOMO135選となっている。

**居室を中心とした住まいの原型
耐震性、断熱性なども入念に計算**

敷地1万余坪。天王山南麓の高台に建つ聴竹居は、木造平屋建ての本屋(ほんお)く、建て面積173㎡、上閉室(同44㎡)、下閉室(同33㎡)の3棟から成ります。家族が住んだ本屋は、東端の玄関から中央の居室を挟み南西に読書室、奥に寝室3室を並べ、東南に客室、北に食堂が配されています。谷側(東南端)に面する縁側は夏の直射日光を避け、冬の日射熱を取り込むサンルームとして位置づけられ、居室などは温度差の少ない中央に集められています。居室を中心に連続した空間は、家族それぞれが居場所を確保しながら繋がり合う設計となっており、現代のリビング・インの住まいの原型といえます。本屋は、数寄屋建築に用いられる自然材料を使用。耐震性を高めるため、土台はコンクリートで固めています。平屋建てに



玄関の内開きドアは客人に対して扉を突き出さないように配慮している。



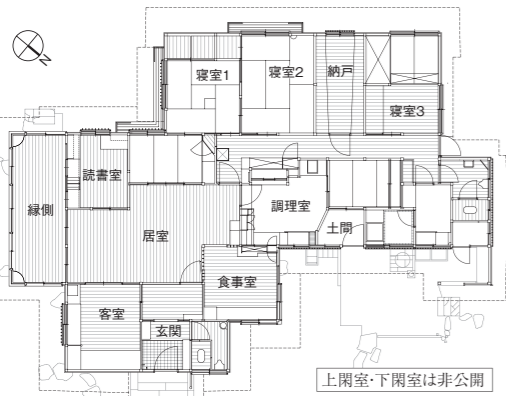
水平線を強調した南側外観。日射調整を考え、庇は1mと深く、勾配も緩やか。妻面には排気用の通風窓が設けられている。

することで耐風性にも配慮。外壁は、断熱性に優れた土蔵壁を採用しています。屋根は、裾の緩やかな勾配部分を銅板葺き、棟に向かい急勾配の部分を瓦葺きと使い分けることで、周辺環境との調和をはかっています。また、北側にある上閉室は、藤井の書斎兼接客室として、下閉室は茶室として使われたといわれています。

**和洋を巧みに統合したモダンデザイン
自然換気システムで室内環境を改善**
藤井は、和風・洋風の様式を比較し、それぞれの長所を生かした様式を取り入れています。腰掛式と、座式の人の目線を合わせ

ため居室の畳の床を30cm余高く設定し、この畳の下には、夏の西風を取り入れる導気筒が組み込まれ、クーラー代わりに使われます。夏の過しやすさを重点に置かれて設計され、室内環境を快適に保つ工夫です。また、取り入れた空気は各室の排気口などを通じて屋根裏へ抜け、妻面の通風窓から排気されます。これは夏に高温になる屋根裏の換気システムも兼ねています。室内の間仕切りには開け閉めできる障子の欄間が仕込まれ、新鮮な空気が建物全体を循環し、室内を常に清潔・快適に保っています。自然との調和、共生を考えた「聴竹居」は、現代の環境配慮型住宅の原点といえます。

聴竹居 本屋平面図 図面提供：竹中工務店設計部



聴竹居は昨年6月から一般公開されています。公開日は水・金・日曜日の10時～15時。事前の予約が必要。聴竹居倶楽部ホームページより必要事項を記入の上、メールにて申し込み。詳しくはこちらへ
<http://chochikukyo.com/contact/index.html>